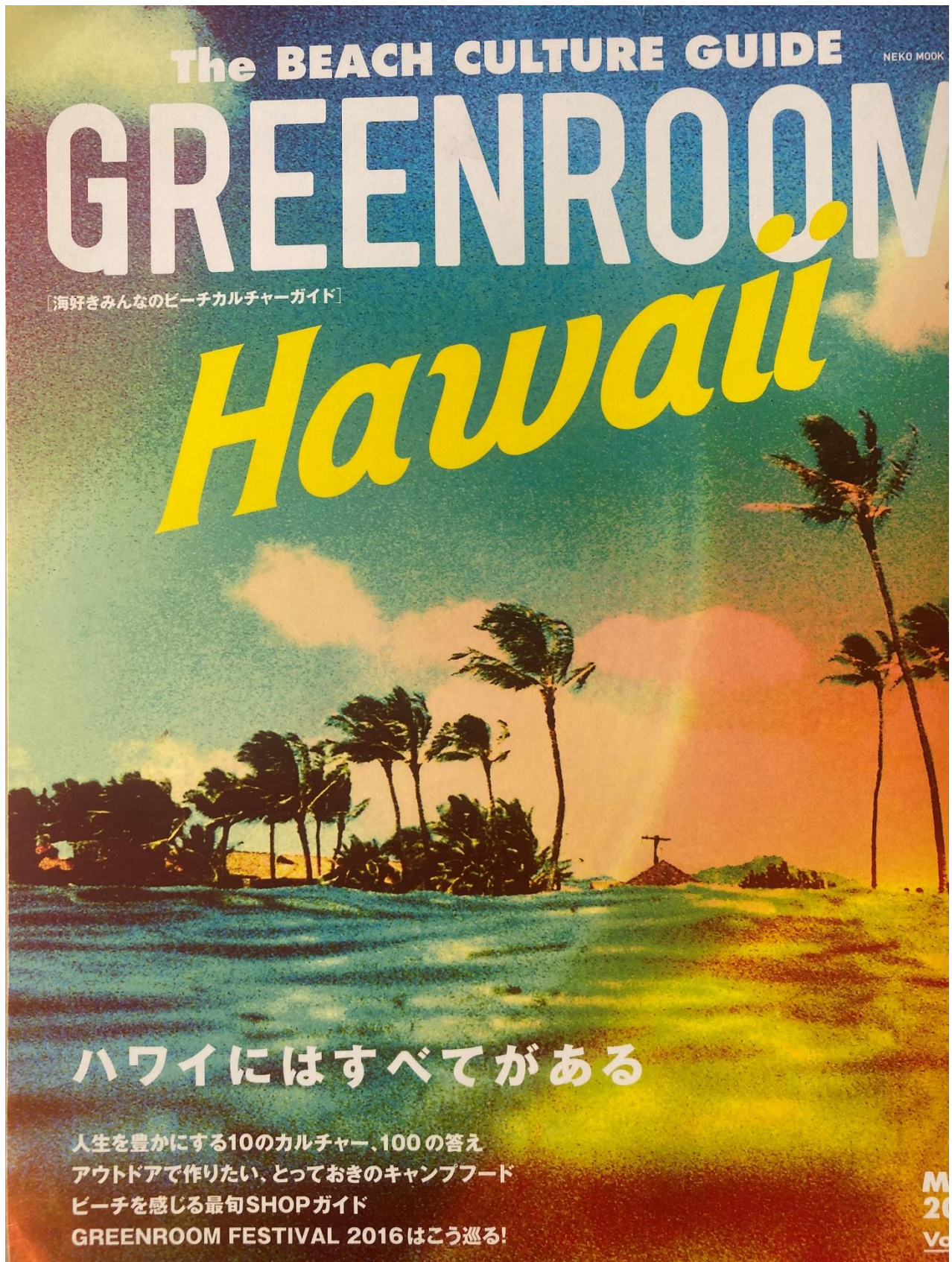


BRIDGETTE MAYER GALLERY



The BEACH CULTURE GUIDE

NEKO MOOK

# GREENROOM

[海好きみんなのビーチカルチャーガイド]

# Hawaii

ハワイにはすべてがある

人生を豊かにする10のカルチャー、100の答え  
アウトドアで作りたい、とっておきのキャンプフード  
ビーチを感じる最旬SHOPガイド  
GREENROOM FESTIVAL 2016はこう巡る!

M  
20  
Vo

709 Walnut Street 1st Floor Philadelphia PA 19106 tel 215 413 8893 fax 215 413 2283  
email [bmayer@bridgettemayergallery.com](mailto:bmayer@bridgettemayergallery.com) [www.bridgettemayergallery.com](http://www.bridgettemayergallery.com)



BRIDGETTE MAYER GALLERY

CA  
California



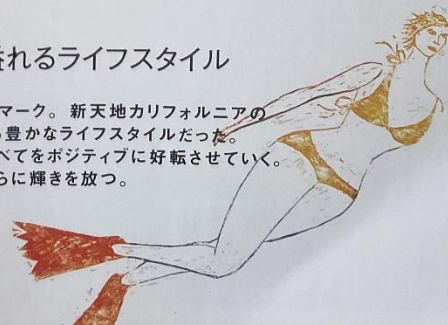
## Julie Goldstein & Mark Tesi

ジュリー・ゴールドスタイン&マーク・テシ

カリフォルニアで芽吹いた創造性溢れるライフスタイル

東海岸から西海岸へと人生のステージを移したジュリーとマーク。新天地カリフォルニアのサンディエゴで出会ったのは、サーフィンが身近にある豊かなライフスタイルだった。その環境が、彼らのアートやクリエイティビティや生活のすべてをポジティブに好転させていく。子どもが生まれたいま、彼らの人生はさらに輝きを放つ。

GREENROOM  
092





# BRIDGETTE MAYER GALLERY



1. 縫い物が得意だった祖母や母親の影響もありソーイングはジュリーのアートにとってごく当たり前の創作技法。いまは日本の海女から影響を受けたイメージやパターンを追求している。2. 個人宅の壁画アートの依頼を受けることもある。3. 海と女性の力強さがジュリーの作品に通底するテーマだ。4. 個人宅の壁画も海女をモチーフにした。5. 眩しい陽光の影響なのか、カリフォルニアに移住してから作品にはカラフルさが増した。6. ジュリーのファブリックアートがプリントされた、アックス・クラシックとSWMのコラボウェットスーツ。彼女のお気に入りだ。7. オフの時間はボードを積んで子どもとビーチへ

ジュリーはアーティストとして、マークはクリエイティブ・ディレクターとして、現在カリフォルニアでそれぞれのスタンスを確立しているが、彼らのストーリーを語るにはまず東海岸時代の話を遡らなければならぬ。もともとふたりの出身はニュージャージー州の沿岸の細長い島。ビーチが至近の環境で育っただけに、サーフィンは身近な存在だった。若いころのマークはプロのミュージシャンとしてバンドで活動していたが、海外ツアー中に長期間サーフィンできなくなるのに耐えられず、30歳を目前にデザイナーへの転身を決意する。もともと大学ではファッションを専攻していただけに、音楽で身につけた創作力やプロデュース能力、美意識などをデザインやクリエイティブ・ディレクションに転換するのは難しいことではなかった。ジュリーと出会ったのもこのころだ。ジュリーはウッドプロダクトのプリントアートやソーイング・アートなどを得意とし、独創的な作風をニュージャージー時代からある程度確立していた。大学ではプリントメーキングで学位も取得。彼女もまた高い美的センスを持ち合わせていた。

そんな彼女は、自分の世界観とセンスを表現したアイコンックなお店「バインサーフ&ギャラリー」を地元「ハイムズ」にオープンする。が、不慮の漏電火災事故により店が全焼。多くの作品を焼失する悲劇に見舞われる。しかしある意味これが転機だった。音楽系の大手企業に勤めアートディレクターとして大きな仕事を任されていたマークも、このころは片道2時間のニューヨーク通勤に悩んでいた。ふたりは気持ちを一新しライフスタイルを見直すべく、西海岸を目指し大陸横断の旅へ出る。そして旅の終着点カリフォルニアで人と波に癒されたふたりが、その後ニュージャージーに戻ることはなかった。「私たちはラッキーだった。いろんな人に助けられ良い仕事に巡り会い、新しい人生を再スタートさせることができたから。なによりカリフォルニアは水も温かいし夏は日も長い。サーフィンとライフスタイルの関わりが東海岸とは比べものにならない。それが気に入った」

そう語るマークはカリフォルニア移住後、ロキシーやリフといった大手サーフブランドでクリエイティブ・ディレクターとして手腕を發揮、カリフォルニアのサーフィニタストリーにおいて多大な貢献をする。いっぽうカリフォルニアでの新たな生活環境はジュリーの作風にも顕著な変化をもたらした。それまで暗い色が多かった作品が一気にカラフルになり、以前にもましてポジティブな創作が増えていったのだ。そのアートはすぐにカリフォルニアのサーフコミュニティに受け入れられ、彼女の名も広く知られるようになった。そしていくつものサーフブランドやパレルブランドとのコラボレーション企画を実現させるべく、アーティストとしての彼女はさらに次なるステージへとステップアップしていく。2014年、ジュリーは自らのブランド「Swim with me (SWM)」を立ち上げたのだ。「自分のアート作品とストーリー

GREENroom



# BRIDGETTE MAYER GALLERY

## CA California

### つねにお互いを刺激して 創造性とアイデアを シェアし前進していきたい

とがリンクしたもので、すべてのアイテムがハンドメイドなの。アートとハンドクラフトを融合させてはいけるけど、あくまでもファッション主体のオーガニックなブランドよ」

ブランド名は彼女のかつてのアーティストのタイトルからとったもの。以前ニューヨークで10年以上上ライフガードをしていた経験がある彼女のバックグラウンドがストーリーリとして盛り込まれている。またSWMは昨年からの日本のプレミアム・ウエットスーツ「アックス・クラッシュ」にもコラボしはじめ、さらにSeaともコラボバッグを作るなど、多方面でさまざまな相乗効果を生んでいる。リーフを退社後、自身のクリエイティブ・エージェンシーを立ち上げたマークも、SWMのイメージ作りやウェブ作成などクリエイティブな面でヘルプしている。

そんなふたりのいま最大の関心事は、今年3歳になる愛息フランキーの成長だ。会社勤めをやめたマークは家で仕事をすることもあり、息子と過ごす時間も増えたと喜ぶ。

「フランキーが生まれたことで、明らかに自分にも良い影響が出ている。いい意味で以前ほど細かいことを気にしなくなったし、何に対しても大らかになった気がする。いまは公私ともに全体的にバランスがとれている感じだね」

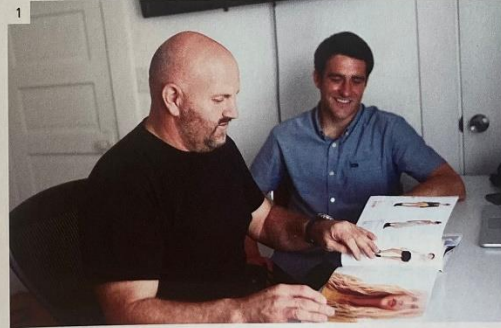
以前大学でブックメーカーキングを教えたジュリーも、いまはママ友の家族が経営するプリスクールで4歳以下の子供たちに週3回アートを教えている。プリスクールなのでフランキーを連れていっていいしょに過ごすことができるのが嬉しい。当面はフランキーが幼稚園に入るまで大学で教えるつもりはないという。

「子どもができて、マークと私には共通の目標もできた。それは児童書を作ること。私たちはベジタリアンだからベジタリアンについての絵本を作るつもり。これは次のプロジェクトね。もうひとつはキッズのクロージングを小規模に手がけること。これも楽しいと思うわ」

またマークもSOHPという石鹸のブランドを立ち上げる予定だ。自分たちが求めるソープがないことから、オーガニックでナチュラルでヘルシーなソープとボディウォッシュとシャンプーをメイド・イン・カリフォルニアのコンセプトで作ることにしたという。ここにもジュリーのアーティストイックなセンスが加味されることになりそうだ。

「私たちは互いに刺激しあつて、それぞれのクリエイティブティとエネルギーとアイデアをつねにシェアし、協力しあいながら前に進んでいる感じ。たぶんこれからもそうね」

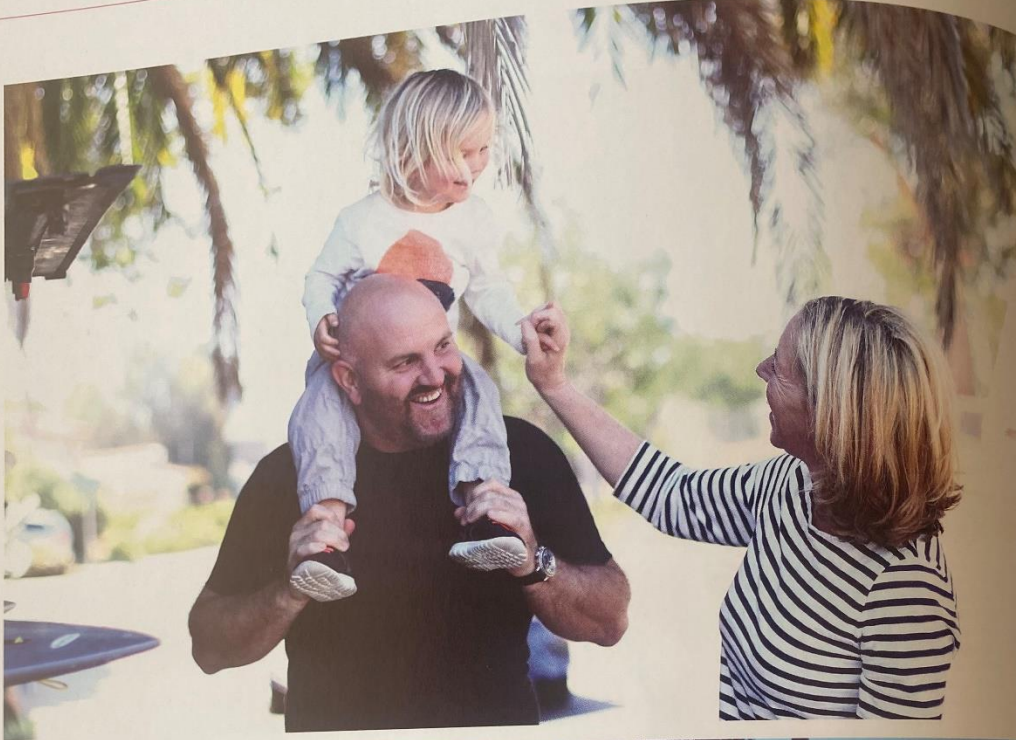
たくさんのプロジェクトを抱え、忙しく子育てをしながらも創造性を失わずにいられるのは、ふたりが互いを鼓舞しあい補完しあい支えあっているから。そのことの大切さを知っているからこそ、ふたりはより強く結びついているのだろう。



1\_マークのクリエイティブ・エージェンシー Wander+Echoはエンシニータスの古いビルにオフィスを構える。主にブランドのグラフィックデザインやウェブデザイン、ブランディングを手がける。 2\_ルックブックの制作もマークの得意とする仕事。クライアントは新しい下着ブランドVNDAやKassia Surf、ヨガ系のブランドなど多岐にわたる。 3\_フォトグラファーでもあるマークの審美眼により、ときにはボラを使ってフォトエディットする。 4\_自宅ガレージのボードラックには短いボードからライダーまでオルタナ系のボードが並ぶ。 5\_アボカドやフルーツを使い手早くヘルシーに朝食を作る



# BRIDGETTE MAYER GALLERY



上\_ふたりにとっていま一番の楽しみは愛息フランキーの成長。ジュリー曰く、言葉をはじめあらゆることをスポンジのように吸収していくのが一番見ていて楽しい年頃だとか。下\_子どもが生まれる前はふたりでサーフィンに行ったり泳いだりしていたが、いまはビーチで子守りをしながら交互に海に入る。でもビーチには同じようなサーファーファミリーが多い。これもカリフォルニアのいいところだ

GREENROOM  
095